

2016 11月-12月

SAITAMA  
ARTS THEATER  
PRESS  
VOL.66

〈彩の国シェイクスピア・シリーズ〉  
2代目芸術監督就任

# 吉田鋼太郎

「蜷川幸雄と  
『彩の国シェイクスピア・シリーズ』」レポート  
蜷川幸雄、劇しき舞台

Noism1

ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団  
『カーネーション-NELKEN』

キット・アームストロング

佐藤俊介

# 蜷川シェイクスピアが よみがえった1日

「蜷川幸雄と『彩の国シェイクスピア・シリーズ』」レポート

10月15日に22回目の開館記念日を迎えた彩の国さいたま芸術劇場。なんとこの日は今年5月12日に他界した蜷川幸雄氏の、81回目の誕生日でもある。そんな記念すべき日に、「彩の国シェイクスピア・シリーズ」を振り返るイベントが開かれ、伝説的な舞台の数々から〈世界のニナガワ〉を偲ぶ日となった。

取材・文●川添史子 Photo●増森 健

## CONTENTS

- 03 〈PLAY〉 蜷川シェイクスピアがよみがえった1日  
「蜷川幸雄と『彩の国シェイクスピア・シリーズ』」レポート
- 06 〈PLAY〉 〈彩の国シェイクスピア・シリーズ〉2代目芸術監督に就任  
吉田鋼太郎 Interview
- 08 連載 〈蜷川幸雄、劇しき舞台〉  
大衆と共振するエネルギーで難題をやり遂げた芸術監督  
内田洋一
- 10 〈DANCE〉 Noism1  
近代童話劇シリーズvol.2『マッチ売りの話』+『passacaglia』  
ダンスと演劇、拮抗する双方の世界
- 12 〈DANCE〉 ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団  
『カーネーション-NELKEN』  
舞台一面のカーネーション……伝説の作品がよみがえる!
- 14 〈MUSIC〉 ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.31  
キット・アームストロング——天才の成熟のとき
- 16 〈MUSIC〉 佐藤俊介の現在 Vol.3 20世紀初頭、花ひらく三重奏  
佐藤俊介 Interview
- 18 中村紘子さんを偲んで 真嶋雄大
- 19 REVIEW
- 20 イベントカレンダー／チケットインフォメーション／彩の国シネマスタジオ
- 23 INFORMATION
- 24 〈COLUMN〉岩松 了 連載「どっちつかずの天使」

[表紙] 〈彩の国シェイクスピア・シリーズ〉2代目芸術監督 吉田鋼太郎 Photo◎細野晋司

編集◎川添史子、榊原律子 デザイン◎柳沼博雅

©公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 Published on 15.November 2016 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation  
※掲載情報は、2016年10月25日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。



大稽古場「NINAGAWA STUDIO」で開催された「蜷川幸雄の稽古場」。蜷川氏が使っていた演出家席も展示された。

埼玉 **アーツシアター** 通信

2016 11月-12月

SAITAMA  
ARTS THEATER  
PRESS  
VOL.66

この日、大ホールのエントランスには「祝 彩の国さいたま芸術劇場開館22周年！」の横断幕が飾られ、お祝いムード満載。この日を楽しみにしていた大勢の観客がスペシャルイベント「蜷川幸雄と『彩の国シェイクスピア・シリーズ』」にかけつけ、開演前から劇場は熱気にあふれた。

イベントの司会は、長年シェイクスピア・シリーズの翻訳を手掛けてきた松岡和子氏。冒頭、今年の夏に発行されたばかりの書籍『Shakespeare's Creative Legacies Artists, Writers, Performers, Readers』でマイケル・ボグダノフ、ケネス・ブラナー、サイモン・ラッセル・ピールといったそうそうたる顔ぶれの演劇人たち

と並んで蜷川幸雄氏のインタビューが掲載されたことに触れ、蜷川シェイクスピアが国際的に評価されている功績を紹介した。

ここで、同シリーズに数多く参加した瑛川哲朗氏が登場。『夏の夜の夢』の英国公演で新聞評が出た翌日から長蛇の列になった思い出など、「蜷川さんには世界へ連れてってもらった」と、日本の誇る巨匠と世界で戦った思い出、シェイクスピアの本場での貴重な体験を語った。そして話題は、瑛川氏が4役を演じ、英国ナショナル・シアターでも上演された『ペリクリーズ』稽古場での思い出へ。イラク戦争開戦の年に上演された同作は、世界中から不幸や病いを抱えた俳優たちが演じているという外枠が付けられたが、松岡氏が、当時付けていた稽古場日誌を披露。祖国を失った人たち

が水を求めて集まる場面で「水の触れ合いが祈りに見えるようにやってくれ。（稽古）2日目だから、そういう高級なことは、言いません」と演出家が発した「らしい」言葉を教えてくれた。

次に登壇したのは、瑛川氏同様、シリーズに欠かせない俳優・横田栄司氏。20代のころ友人に誘われて蜷川スタジオのエチュードに参加し、蜷川氏に「俺の45分を返せ。でも根性はある」と言われた初対面の思い出を語り、場内の笑いを誘った。なんとその後『ハムレット』のレアティーズのオーディションを受け、エチュードの一件を思い出した演出家が横田氏の採用を即決したというドラマチックなエピソードも。妹オフィーリアの死を泣き叫んで悲しむ場面では「自分の知らなかった自分に出

合った」と、熱い稽古場を振り返った。横田氏いわく、長くて難しいシェイクスピアのセリフを何度も練習すると、口が勝手にしゃべり出す「シェイクスピア・ハイ」という状態になるとか！

最後のゲストは、さいたまネクスト・シアターの豎山隼太、手打隆盛、内田健司。さいたまネクスト・シアター×さいたまゴールド・シアター『リチャード二世』(王冠譲渡)の映像を流しながら、ライブでセリフを朗読し、蜷川シェイクスピアの集大成とも言える伝説の舞台を再現した。

そして話題は、蜷川氏が生前シリーズを全部演出し終わったらあらためて手掛けたいと話していた『テンペスト』に。2000年、能舞台で役者たちがリハーサルをしているという形の舞台は、「蜷川さんにとっ

て私小説ならぬ私演出だったと思う」と、松岡氏が当時のことを回想。主人公プロスペローが長年の復讐を果たし、手伝ってくれた妖精に御礼を言うシーンの稽古場の秘蔵映像を映した。映像の中で演出家は「(プロスペローのセリフは)一緒に芝居をつくってきたスタッフに御礼と別れを言う、決別の日のあいさつのようなもの」と説明しており、同作が蜷川氏自身の演劇人生と重ねられた意図が伝わってきた。そして横田氏がプロスペローのエピローグを大迫力で朗読すると、客席は感動に包まれた。

フィナーレでは吉田鋼太郎氏が同シリーズの芸術監督に就任したことを発表。大きな拍手でイベントが締めくくられた。



### 彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア企画委員会が9月20日に開催されました

残り5作となった「彩の国シェイクスピア・シリーズ」。上演にあたっては、英文学者の河合祥一郎委員長を筆頭に、翻訳家・プロデューサーら専門分野の方々による「彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア企画委員会」が組織されており、それぞれの立場から今後のシリーズ展開や上演方法についての方針が検討されている。このたび、蜷川幸雄氏の長女で写真家・映画監督として活躍する蜷川美花氏が新メンバーとして参加。最後まで魅力的な企画として走り続けるシリーズに、期待が高まる。



松岡和子氏



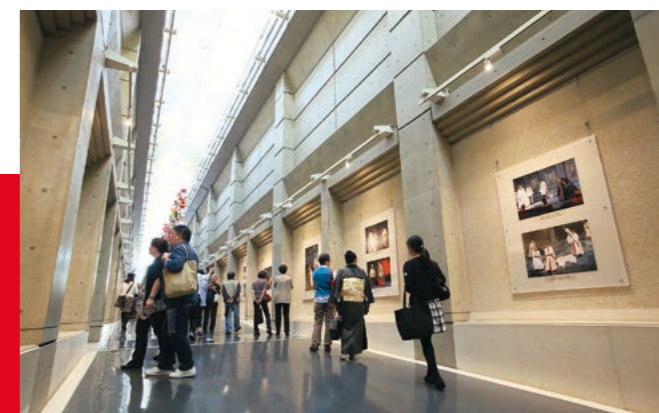
瑛川哲朗氏



横田栄司氏



さいたまネクスト・シアター (左から) 内田健司、豎山隼太、手打隆盛



1階ガレリアで行われたのは、彩の国シェイクスピア・シリーズの写真展。数々の名作を、名場面の写真で振り返った。



Photo©細野晋司

盛り上がったのは彩の国さいたま芸術劇場だけではない。朝、都内のホテルで記者会見が開催され「彩の国シェイクスピア・シリーズ」の2代目芸術監督に吉田鋼太郎氏が就任したことが発表された。意気込みを聞いたインタビューは次頁。

## 彩の国シェイクスピア・シリーズDAY となった10月15日



トークイベントに加え、劇場内ではさまざまな催しが開催された。大稽古場「NINAGAWA STUDIO」では蜷川幸雄芸術監督の稽古場を再現。劇中で使われた小道具・大道具や、インタビュー映像などに多くの人が真剣に見入っていた。



吉田鋼太郎  
Kotaro Yoshida

シェイクスピア・シアター、東京音組を経て97年に劇団AUNを結成。以来、数多くのシェイクスピア作品に出演し、演出も手掛けている。彩の国シェイクスピア・シリーズは『タイタス・アンドロニカス』主演での登場以来12作品に出演。それ以外にも『ムサシ』『オレステス』『天保十二年のシェイクスピア』など多くの蜷川作品に出演している。



俳優の吉田鋼太郎氏が「彩の国シェイクスピア・シリーズ」の2代目芸術監督に就任。初代芸術監督の故・蜷川幸雄氏の遺志を受け継ぎ、残り5作品の完全上演に挑む。誰もが認める“シェイクスピア俳優”として熱い信頼を得ている吉田鋼太郎氏に、就任記者会見後、あらためてシリーズへの思い、蜷川氏との思い出などを聞いた。

取材・文●上野紀子(演劇ライター)  
Photo●細野晋司

## 〈彩の国シェイクスピア・シリーズ〉 2代目芸術監督に就任

# 吉田鋼太郎

## Interview

——まずは就任記者会見を終えて、心境をお聞かせください。

蜷川さんの仕事の後を継ぐという重要な発表の席なので、緊張するだろうな、ちゃんと思いを伝えられるだろうか……とのぞみましたが、こと蜷川さんに関してはやはり多くの思いがありますので、しっかりとしゃべることができたかなと思います。ただ、自分が蜷川さんの代わりに壇上に座っているということが一瞬分らなくなる感覚もありました。普通なら蜷川さんはここにいらっしやっただのに、ああ、本当にいな

くなっちゃったんだな……という気はしましたね。

——会見で、蜷川さんが病床で「鋼太郎さんにシェイクスピア・シリーズを託したい」とおっしゃったことが紹介されました。おそらくここ数年の蜷川さんとお仕事の中で、そんな予感があったのではないかと思います。

『NINAGAWA・マクベス』の稽古の時に「鋼太郎、ちょっとこのシーンやってくれないか」と言われたことがあったんです。そしてネクスト・シアターの若い俳優たち

に「鋼太郎が何を言うのか、ちゃんと聞いて勉強しろ」と言い渡してね。皆が「鋼太郎が演出してるじゃないか」とびっくりしたんですよ。その時に、何かを託そうとしているのかな……とは感じましたね。

——『テンペスト』のプロスペロー役を鋼太郎さんに依頼していたというお話からも、その思いが伝わります。

『テンペスト』はやりたかったですね、本当に。あれは『ムサシ』の公演中だったかな。蜷川さんが急に、「俺もあと5、6年だろうから、それまでには『テンペスト』を



記者会見で意気込みを語る吉田氏(中央)。左はホリプロのファウンダー最高顧問・堀威夫氏、右は公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団理事長・竹内文則

やりたいな。鋼太郎、プロスペローをやってくれよ。それを最後にするから」とおっしゃって。シリーズを『テンペスト』で締めるということと同時に、それでシェイクスピアの演出を最後にするという意味でもあったように思うんです。「えっ、そんなすごいことをやらせてくれるんですか!？」って言っているうちに俺、涙が出てきちゃって。最後だなんて言わないでほしいと思いつつ、うれしい気持ちもありましたね。

——“シェイクスピア俳優”である鋼太郎さんとしては、蜷川さんのシェイクスピアへの取り組みをどう見ていらしたのでしょうか。

最初に蜷川さんのシェイクスピアを見たのは、僕が高校生の時、1975年の『リア王』なんですよ。日生劇場で、市川染五郎さん(現・松本幸四郎)主演の舞台です。僕はまた一方で、渋谷にあった小劇場ジャン・ジャンで劇団シェイクスピア・シアターの公演も観ていて、その両方ともに面白さを感じていたんです。どちらかという僕は小劇場のほうに傾倒していて、「商業演劇ってどうなんだ?」と思うような若さもあったね。でも蜷川さんの『リア王』は破壊的で、ダイナミックで、ものすごいインパクトがあった。その演出にはすごくあこがれを持っていたんです。その後、本場のイギリス人演出家と芝居をやる機会にも恵まれたけれど、どうも何かが違うなど。理

詰めで、面白くない。もちろん理詰めである必要もあるんだけど、その域から出ていないなど。だったら蜷川さんの破壊的なシェイクスピアのほうの方が面白かったんじゃないかと思うわけですね。で、ご一緒できるようになって分かったのは、蜷川さんは破壊的なだけじゃない、ちゃんと論理的でもある。その上であのイメージを持ってこられるので、やるほうとしては大変なんです(笑)。当時、僕が『グリークス』でご一緒した時は、まだ蜷川さんは俳優のセリフについてはそれほどおっしゃらなかったんですよ。単に大きく、朗々としゃべってくれと。ところがある時期から「違うな。ちゃんと人間の言葉としてしゃべらなければいけない」となった。朗読もどほどにしないと、自分の演出が伝わらない。「ちゃんと相手に伝えてくれよ!」と言い出すようになった時から、完全に俺と蜷川さんは方向性が一緒だと思い始めました。

——シリーズ第33弾として来年12月に『アテネのタイモン』をご自身の演出・主演で上演されますが、思い入れのある作品ですか?

そうですね。僕は、過去に一回やっているんですが、それ以外、日本ではほとんど上演されたことがないんじゃないかな?

シェイクスピア作品は読むのと実際に演じるのとでは違いがあって、戯曲を読むと「整合性がないな」と思っても、やってみると「なるほど。人間というのはこういう行

### 「彩の国シェイクスピア・シリーズ」とは

シェイクスピア戯曲全37作品の完全上演を目指すシリーズ。1998年のスタート以来、これまでに32作品が上演された。残り5作品は『アテネのタイモン』『ジョン王』『ヘンリー五世』『ヘンリー八世』『終わりよければすべてよし』。

動をするかもしれないな」ということが起こる。それが多い芝居なんですね。矛盾が多いから皆さん、なかなか手をつけられないけど、僕自身はとても面白い芝居だと思っています。

——会見で、蜷川さんのことを「父のよう」とおっしゃっていましたが、あらためて蜷川さんはどんな人だったと感じていらっしゃいますか?

いろいろ理不尽なことを言われた印象もありましたが、亡くなってみると、その全部が自分の成長過程のある何かとして残っている。結局それは僕らのために言ってくれたことなんだなと。やっぱり“お父さん”ですよ。甘いだけじゃなくて苦いことも言う。無理難題も押しつける。「でもお前、それで大きくなったろう?」って言うことだったんだな、というのが今になって分かるんです。

——今度は鋼太郎さんが、若い俳優たちの父になるのでしょうか。

そういうことになってきますよね。ただ、蜷川さんは「俳優はどんな思い切ったことでもやっていいんだよ」ということをしきりにおっしゃってましたので、自分が父の立場になったとしても、丸く収まったり、説教臭いだけになってはいけななと。自分もまだまだ成長過程にあると思って、前に進んでいきたいと思っています。

蜷川幸雄氏の活動を振り返る連載の最終回は、  
長年蜷川氏の舞台を見続けてきた内田洋一氏。  
〈芸術監督〉という側面から、孤高の演劇人の横顔を見る。

## 大衆と共振するエネルギーで 難題をやり遂げた芸術監督

文◎内田洋一

近所のそば屋から出前を取ろうとしたら、劇場の場所を知らなかったんだよ。蜷川幸雄さんはそんなふうに彩の国さいたま芸術劇場の課題を言い表したものだ。芸術監督としてなすべき第一はまずお客さんに来てもらうこと、そして地元の人たちに知ってもらうことだった。シェイクスピアでも名の通っていない作品では、オール・メールの話題で集客をはかる。「スターにあこがれるお客さんの方がよっぽど健康的なんだ」と話していた。

そういう発言を耳にするたび、ああ、自

分への戒めなんだと感じた。読書家で勉強家の蜷川さんの根にあるのは、青白い文学青年の相貌である。そちらの蜷川さんは潔癖に哲学的な思索を深めていく。が、同時にその文学的求心にブレーキをかける、もう一人の蜷川さんがいただろう。

開幕三分間へのこだわりは日々懸命に生きる生活者を退屈させてはならないという決意表明でもあった。生まれ育った鑄物の街、川口で真っ黒になって働いていた男たちを忘れまい。過酷な巡業で知られたこまどり姉妹を『ハムレット』に配役したのは、

地をほうような視線を舞台に取り入れるためだった。自分の舞台は彼らの視線にどこまで耐えられるのか、と蜷川さんにとって急進的な「知」の運動をあるところで引き留める力こそが演劇だったのではないだろうか。「知」の走力にあるところでブレーキをかけ、大衆と共振するエネルギーを保ちつづける。芸術監督の役割はそこにあると思いつけていた気がする。

1984年に演劇記者になった私は、劇場のありかたに特別な関心をもって取材してきた。バブル経済を頂点とする好況期、自治体や企業がこぞって劇場を造ったからだ。芸術監督という耳慣れない言葉もそうした動きの中から生まれた。その嚆矢は80年代後半のスパイラルホールで、佐藤信さん、木村光一さん、それから蜷川さんが相次いで短期的に務めた。が、それは劇場の個性を強調するという程度の内容で、決定的だったのは水戸芸術館の鈴木忠志さん（のち静岡県芸術文化センター）、オーチャードホールの佐藤信さん（のち世田谷パブリックシアター、座・高円寺）だったといえる。佐藤さんはプロデューサー、ディレクターという呼び名で芸術監督像を築いた人である。

富山県の利賀村に本拠を定めていた鈴木さんは自治体と協同して劇場の建設段階か

らかかわり、予算執行権、人事権をも握る欧州型の芸術監督を創始した。専属劇団を常設する演劇の王国を創り、能に通じるメソッドで国境の壁を超える前衛演劇を推進した。他方、佐藤さんは黒 TENT 時代からのパブリック・シアター論を実践し、知の先導者としての劇場を目指した。一方、蜷川さんは正面から大衆と対する姿勢をとった。彩の国さいたま芸術劇場を当初指導したのは作曲家の諸井誠さんで、演劇部門の相談相手にしたのは鈴木さんだったが、スノッパな観客の集まる先端的な劇場は蜷川さんの登場で、カラーをがらりと変えた。

蜷川さんと鈴木さんは宿命のライバルだ。仲が悪いとみる向きもあったが、そうではない。互いの違いを見定め、その距離をはかり、自分の居場所を確定する、それが1960年代演劇のありようだったのだ。稽古場で「その演技じゃ、鈴木忠志になっちゃうんだよ」とののしっていた蜷川さんは、首都圏で上演機会のない鈴木さんに埼玉でやらないかと手を差し伸べてもいた。蜷川は商業主義だと息巻いていた鈴木さんはその死を痛恨事と受けとめた。今年の夏、鈴木さんは利賀村のシンポジウムで「悪口は言っても、いざとなれば手を差し伸べるのが演劇人なんだよ」と偲んだ。

いささか唐突ながら、私は二人を大正期



さいたまネクスト・シアター第3回公演「2012年・蒼白の少女少女たちによる『ハムレット』」 Photo◎宮川舞子



さいたまネクスト・シアター第2回公演「美しきものの伝説」で先生（島村抱月）を演じる原 康義氏（中央） Photo◎宮川舞子

の小山内薫と島村抱月になぞらえたい。築地小劇場の向こうをはって早稲田小劇場（現SCOT）を始めた鈴木さんが小山内なら、浅草の大衆を大切に抱月は蜷川さんだろう。抱月への蜷川さんの思いの深さは『美しきものの伝説』（宮本研作）の演出で明らかだった。芸術至上の小山内は浅草で興行する抱月を口汚くののしただけけれど、自らが浅草で集客できない現実に打ちのめされると、こう記していた。「民衆を吾々のものにするには、吾々が先づ民衆のものにならなければならない」（『演出者の手記』）

抱月の二元の道、小山内が行き暮れた

道、それらの先をやはり蜷川さんは旅していた。西洋演劇、とりわけシェイクスピアを大衆に根づかせるといふ、新劇が果たせなかった難題をやり遂げたことが蜷川さんの最大の功績だったと私は考えている。砂をかむような孤独な旅の味、それを知る者こそが芸術監督といえるであろう。

内田洋一  
Yoichi Uchida

日本経済新聞社社会部を経て1984年より文化部で舞台芸術を中心に取材。大阪本社勤務を経て現在編集委員。主な著書に『あの日、突然遺族になった 阪神大震災の十年』（白水社）、『野田秀樹（日本の演劇人）』（白水社）、『現代演劇の地図』（晩成書房）、『危機と劇場』（晩成書房）など。蜷川幸雄 「演劇のカー私の履歴書」（日本経済新聞出版社）では聞き手を務めた。



埼玉県知事の上田清司氏と芸術監督就任の展望を語る蜷川氏（2006年1月「埼玉アーツシアター通信」より） Photo◎小瀬 栄

# Noism1

近代童話劇シリーズ vol.2

## 『マッチ売りの話』 + 『passacaglia』

### ダンスと演劇、拮抗する双方の世界

来年2月、彩の国さいたま芸術劇場に登場するのは、金森穰率いる「Noism」。確かなテクニックによるダンスと劇世界——両領域をミックスし、唯一無二の舞台を構築する注目カンパニーの魅力解説する。

文◎高橋彩子（舞踊・演劇ライター）



劇的舞踊『ラ・バヤデール—幻の国』 Photo◎篠山紀信

ある種の演劇の観客は、言葉のないダンスに息苦しさを覚えるという。逆にダンスの観客の中には、演劇が構築する言葉の世界に違和感を覚える人も。ダンス／演劇の作り手の一部にも、言葉への不信／踊りへの抵抗感は見受けられる。そんな中、敢然と二つの領域をまたぐ試みを続けているのが、金森穰率いるNoismだ。

その試みが顕在化したのは『Nameless Hands～人形の家』(08年) だろう。本作の冒頭、“支配人”が見世物小屋公演の開幕を宣言。黒衣が人形ぶりの舞踊家を動かすという仕掛けを通じて、踊りの主体性とは誰か、劇的な身体とは何かという命題に迫った。この作品は「見世物小屋シリーズ」第1弾となり、第2弾としてチェーホフの小説『黒衣の僧』『六号病室』に基づく『Nameless Poison～黒衣の僧』(09年)、第3弾として水と声をモチーフに、現代社会に警鐘を鳴らす『Nameless Voice～水の庭、砂の家』(12年) が生まれた。

同シリーズと前後して始まったのが、オペラやバレエなどの名作を再構築する「劇的舞踊シリーズ」だ。第1弾『ホフマン物語』(10年) は、原作オペラに登場するオランピア／ジュリエッタ／アントニア（いずれも井関佐和子）の相手として3人のホフマン、さらにその妻たちを登場させる独自のドラマに。第2弾『カルメン』(12年) では、有名なオペラの原作であるメリメの小説に立ち返り、作者役としてSPACの俳優、奥野晃士を起用し、語り手の役割を担わせた。バレエの名作を劇作家・演出家の平田オリザが翻案した第3弾『ラ・バヤデール—幻の国』(16年) では、架空の国マランシュ帝国（満州国のイメージが重ねられている）を舞台に、騎兵隊長バートルと

踊り子ミランと皇女フィシェンの物語が展開。出演者にSPACから再び奥野晃士、さらに貴島豪、たきいみきといった俳優を招いたが、中でも、井関扮するミランとたきい扮するフィシェンが言葉と踊りとで対峙する場面は、金森の劇的舞踊の試みを象徴するものだった。

こうして見て行くと、金森作品に従来あったテーマ性や物語性をより強く打ち出し、観客と思索を共有するために、言葉を含む演劇的な要素が重要度を増していき、これに拮抗すべく、自ずと身体の強度も高まっていったことがうかがえる。

一方、セリフは入れず、新たな発展を見せたのが、最新シリーズ「近代童話劇シリーズ」の第1弾『箱入り娘』(15年)。金森はバルトーク作曲のバレエ『かかし王子』の王子と王女を、“ニート”と“箱入り娘”に設定し直し、SNS時代のヴァーチャルな世界を風刺した。セリフがないとはいえ、極めて具象的でメッセージ性の強い作品ができ上がっていたのは、見世物小屋シリーズや劇的舞踊シリーズの成果と無縁ではないだろう。

近代童話劇シリーズ第2弾となる次作、『マッチ売りの話』+『passacaglia』にも、社会への鋭い眼差しを見て取ることができるのではないだろうか。



『箱入り娘』 Photo◎篠山紀信

第一部『マッチ売りの話』は、アンデルセン童話『マッチ売りの少女』と、この童話を下敷きにした別役実の同名戯曲から、金森がオリジナル台本を書き下ろすものだという。別役作品では場所や時代は明示されないが、客にマッチを擦らせ、火がついている間、スカートの中を見せていたというエピソードが登場し、終戦直後の日本を彷彿とさせる。復興の中で葬った“近代史”に光を当てる“童話”と考えれば、これ以上に「近代童話劇シリーズ」にふさわしい題材もない。金森の演出ノートでは、アンデルセン童話でマッチを擦った少女の前に現れる幻影が「真鍮のストーブや豪華な食器類、あるいは贅沢な料理といった人間の欲望（自然の征服／物欲／食欲など）に満ちていること」および「その延長上に信仰（亡き祖母の霊に導かれて天国へ行く）が語られること」に焦点が当てられている。また、別役戯曲については「不条理な展開の中に、まさにそれら人間の欲望が責任問題を通して語られ、現代人にとっては欲望こそが信仰であり、その責任を誰が取るのかという問いを私たちに投げかける」、と指摘する。

この第一部に関わる第二部として上演されるのが『passacaglia』。ビーバーの「ロザリオのソナタ」15曲のあと、唯一、無伴奏で奏でられるバイオリンソナタに、金森は「気高い理想への信仰を抱きつつも、欲望にまみれたこの俗世をその身一つで生きてゆかなければならない現実に対する、痛切な決意のようなもの」を感じるようだ。

人間の欲望、信仰、そして決意が、身体を通じて思索され具現化される時、そこには既存のダンスとも演劇とも違う、新たな世界が立ち現れるかもしれない。

#### Noism1

りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館を拠点に活動する日本発の劇場専属舞踊団Noism（ノイズム）。演出振付家・舞踊家の金森穰がりゅーとびあ舞踊部門芸術監督に就任したことにより2004年に設立。プロフェッショナルカンパニーNoism1と研修生カンパニーNoism2で構成され、新潟から世界を見据えたカンパニー活動と、舞踊家たちの圧倒的な身体によって生み出される作品は国内外で高い評価を得ている。

Noism1＝井関佐和子（副芸術監督）、中川 賢、石原悠子、池ヶ谷奏、吉崎裕哉、リン・シーピン、浅海侑加、チャン・ジャンユン、坂田尚也

発売日 一般 11.26(土) メンバーズ 11.23(水・祝)

#### Noism1

近代童話劇シリーズvol.2『マッチ売りの話』+『passacaglia』

2017年2.9(木)・10(金)19:30、11(土・祝)15:30／19:30、12(日)15:30

彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【演出振付】金森 穰 【衣裳】中嶋佑一 【振付&出演】Noism1

チケット(税込) 全席指定 一般 5,500円／U-25\* 3,500円

【主催】公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

【共催】公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

\*開演時間を過ぎますと、演出上の都合によりご入場を制限させていただきます。予めご了承ください。  
\*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

舞台一面のカーネーション……  
伝説の作品がよみがえる！

## ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団 『カーネーション-NELKEN』

彩の国さいたま芸術劇場ではすっかりおなじみの、ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団。来日する度、美しく、心を大きく揺さぶる舞台を届けてくれる彼らが、代表作『カーネーション-NELKEN』を上演する。実に日本への上陸は28年ぶり、伝説の舞台を見逃すな！

文●佐藤友紀(ジャーナリスト)



暗い劇場内に灯りが点いた途端、舞台一面に植えられたおびただしい数のピンクのカーネーションの花がパッと浮き上がる。もうこれだけでも期待でドキドキするのに、ピナ・バウシュの代表作『カーネーション-NELKEN』が連れていってくれる世界の深さ、美しさ、豊かさと言ったら！初演から30年以上経った今も、世界中の劇場から上演オファーが途絶えないというのも当然だろう。

カーネーション畑ではワンピース姿の男女が集い、椅子に腰かけて何やら談笑している。そう、女性ダンサーだけでなく男性ダンサーも同じようにドレス姿なのだが、サイズが合わないせいか、背中ファスナーは途中までしか上がっていない。でもそんなことは気にすることなく皆、花を踏み倒しながら駆け回ったり、椅子を横一列に並べて腰かけてのラインダンスを踊ったり。流れてくる音楽もシューベルトの《死と乙女》があれば古いジャズもあったり。ピナの作品には時々お年寄りの体操選手や楽団などが唐突に登場するが、本作にもおよそカーネーションにそぐわない面々が現

れ大暴れるので乞うご期待。

ほかにカーネーション畑に登場するのは、半裸でアコーディオンを抱えた女性などシュールな人物ばかり。それでいて、大騒ぎの最中、犬を連れて役人らしき人間が「パスポート、見せてください」と言うと、みんな真顔に戻って舞台袖に置いてあった各々の荷物からパスポートを取り出して提示するシーンが現実的で少々恐怖を感じる。というのは、ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団の人気を確かなものにしたヴィム・ヴェンダース監督の『ピナ・バウシュ 踊り続けるいのち』以前の傑作ドキュメンタリーで、アヴィニオン演劇祭での本作の屋外上演を撮ったシャンタル・アッカーマン監督の母親が、件のシーンを見て「ナチを思い出す」と語ったというのだ。ヨーロッパでの『カーネーション-NELKEN』上演にはシェパード犬が起用されており、ユダヤ系の人にとって今なお複雑な思いを抱かせるということはわかった上で創作する覚悟、ピナと同じドイツ人のヘルマー・サンダース・ブラームス監督も語っていたが、「そうした負の歴史も、

引き受けるのが我々の使命」なのかもしれない。

それとは真逆なのが、現在ヴッパタール舞踊団の芸術監督を務めるルッツ・フェルスターによる手話での『ザ・マン・アイ・ラブ(私の愛する男)』。元々はルッツがアメリカ留学中に習得した手話を使ってみたいというアイデアから生まれたシーンだが、ピンクの花畑の中、スーツ姿の男性が一人ポツンと立って、音楽、それも古いレコードの同曲が流れてくると指と手だけで恋心を歌う。それまでのアクロバティックな動きとは一転した静けさに、どれほど心が洗われることか。一流ダンサーならではの、信じられないほど美しい指づかいあつてのことだが、以後ダンスの世界で手話を使った振付が増えるきっかけとなった名シーンである。

それにしても、前述のヴェンダース監督を始め、ピナには自分たちも一流の芸術家でありながら「ファンなんだよ」と公言する人間が多いことにあらためて驚く。スペインのペドロ・アルモドバル監督は映画『トーク・トゥー・ハー』にピナの存在、作品



Photo©Jochen Viehoff

発売日 一般 12.3(土) メンバーズ 11.26(土)

ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団  
『カーネーション-NELKEN』

2017年3.16(木)・17(金)19:00、18(土)15:00、19(日)14:00  
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

[演出・振付]ピナ・バウシュ [出演]ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団

チケット(税込)

一般 S席11,000円 A席7,000円 B席5,000円

U-25\* S席7,000円 A席5,000円 B席3,000円

メンバーズ S席10,000円 A席6,300円 B席4,500円

\*演出の都合により、開演時間に遅れますとお席へのご案内ができない場合がございます。  
\*A席・B席(サイドバルコニー・2階席の一部)は舞台の一部が見えませんがご了承ください。  
\*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

を重要なモチーフとして使っているし、舞踊団の本拠地ヴッパタールにも足を運んでいた。同地にはフランスの騎馬パフォーマンス集団ジンガロの主宰者バルタバスもしょっちゅう現れ、「ピナと共同で何か創るんだよ」と語っていた。イタリアの巨匠フェデリコ・フェリーニ監督は『カフェ・ミュラー』のローマ公演を見てピナに惚れ込み、自分の映画に出演するように依頼。彼女が「演技なんてしたことがないから」と言うと、「なら舞台上で君がやっていた役柄でいいよ」と『そして船が行く』の、盲目の皇女役をピナのために作ったという。

このほかにも、ソフィア・コッポラ監督、

ケイト・ブランシェット、ジュリエット・ピノシュ、シルヴィ・ギエム……etc. 筆者が直接聞いただけでもピナという人間、創作に刺激を受け自分の芸術に反映させている人ばかり。いや、こうした名のある人々のみならず、ドキュメンタリー映画『ピナ・バウシュ 夢の教室』にもとり上げられた、それまでピナ・バウシュのことを知らず『10代の少年少女のためのコンタクトホープ』で初めてピナの世界に触れた若者たちのように、これからもピナの思いをバトンタッチしていきたいと考える気運もますます高くなりそうだ。

Photo©Wilfried Krüger



ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団  
Tanztheater Wuppertal Pina Bausch

1973年、ドイツの工業都市にあるヴッパタール・バレエ団の芸術監督にピナ・バウシュが就任、ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団と改称。ダンスと演劇が共生する「タンツテアター」による斬新かつ衝撃的な話題作を次々に発表し、世界の舞台芸術界に多大な影響をあたえた。2009年、ピナは惜しくも逝去するが、その遺志を継ぎ舞踊団はその後も精力的に公演を行っている。1986年以来たびたび来日公演を行い、彩の国さいたま芸術劇場には1996年に初登場、2004年には『天地 TENCHI』を共同製作し、2014年には代表作『KONTAKTHOF-コンタクトホープ』も上演。今回、6度目の埼玉公演となる。

# Kit Armstrong

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.31

## キット・アームストロング ——天才の成熟のとき

天才とはまさに彼のこと。そう思わせるのがキット・アームストロングだ。  
巨匠アルフレート・ブレンデルの愛弟子で、師から絶賛される才能を持ち、  
ピアニストだけでなく作曲家であり、さらに数学の学位も持つ。  
現在24歳。天賦の才は成熟し、音楽は無限に深化中だ。  
2017年1月「ピアノ・エトワール・シリーズ」は、バロックと自作によるプログラム。  
知性と感性が音と戯れる、キット・ワールドのリサイタル!

文●伊熊よし子 (音楽ジャーナリスト)

### 落ち着きと安定感 大家のような風格に満ちた響き

取材やインタビューで出会うアーティストは、天才的な才能の持ち主や幼いころは神童と呼ばれた人が多い。若きピアニスト、キット・アームストロングもそのひとりだ。

彼は偉大なるピアニスト、アルフレート・ブレンデルから「私が出会ったもっとも類まれなる才能」と評された逸材で、2015年3月5日には浜離宮朝日ホールで日本初リサイタルが行われたが、まさに輝かしい未来を予感させた。

当日は、J.S.バッハの《コラール前奏曲集》より3曲と、《パルティータ第6番》、リストの《メフィスト・ワルツ第1番》の間に自作を盛り込んだ個性的なプログラムを組み、バッハをこよなく愛するという姿勢を見せた。

キットの演奏は、いずれの作品も自信あふれる堂々としたもので、とりわけみずみずしい音色と確固たる構成感、躍動するリズムが印象的である。もっとも驚かされたのは、ときおり見せる大家のような風格に満ちた響き。

まだ20代前半だというのに、この落ち着きと安定感、作品を完全に手の内に入れた奏法は、どのようにして生まれたのだろうか。それはインタビューをしたときに明らかになった。

彼はごく幼いころから数学や科学、そして音楽にも強い興味を示していたが、5歳からはピアノを始めた。そしてまたたくまに上達。

「ぼくは子どものころからスコアを見ると音楽が聴こえ、音楽を聴くとスコアが見えるのです。よく作文を書くと、音読しなく

てもその内容は理解できますよね。それと同じで、音を出さなくても、楽譜を見るだけでその音楽が自然に聴こえてくるわけです」

### 深遠さと多様性 バッハのすべてに心がとらわれる

こういう話を聞くと、まさに天才少年というべきキットだったが、13歳のときにアルフレート・ブレンデルに師事し、彼から音楽の哲学に関する事柄を学んだという。さらに作曲家でもあり、デビュー・アルバムでは自作も収録。だが、ここでもバッハが印象的だ。

「バッハの音楽は、自分の成長においてなくてはならないものです。幼いころ、最初に聴いたのがバッハの音楽でした。当時はテクニック面に興味があり、やがて構成や内容、表現、主題の在り方や和声やリズム、アーティキュレーションに魅せられるようになりました。その後、バッハの人間性にも興味を抱くようになり、いまはバッハのすべてに心がとらわれています。バッハは限りなく深く多面的な側面を有している作曲家です。その作品を知れば知るほど、弾けば弾くほど、深遠さと多様性に魅了されます。とりわけぼくが惹かれるのは、“静と動”の絶妙なバランス。それが単なる対比性や融合性を示すのではなく、その作品の奥にえもいわれぬ美しい色彩と一種のムードを持ち合わせています。すばらしいことだと思いませんか」

### バッハと自作、そしてスウェーリンク キットの世界を堪能する

ブレンデルのレッスンも、テクニックなどの奏法面ではなく、精神性や文化論、芸術性などに関することがほとんどだったそ

うだ。それは、ときに哲学のような様相を帯び、古い音楽をいかに現代に蘇らせるかが音楽家の仕事であり、それは生きた音楽でなくてはならないということを伝授された。

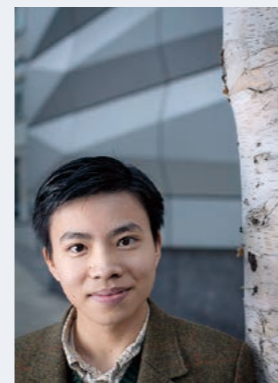
「音楽というのは単純な表現法ではなく、その背後に横たわるさまざまな物を理解しない限り、生きた音楽にはならないと強くいわれました。いまのぼくの演奏には、ブレンデル氏のこの教えが生きています」

キットはブレンデルと話す、いつも感じることもある。それは、彼が「偏見をもたないこと」。あらゆることに目を開き、その視野の広さには常に驚かされるという。そして、最近、もっとも二人の話が弾んだのが、バッハの《ゴルトベルク変奏曲》に関してだった。

「ブレンデル氏は、《ゴルトベルク変奏曲》を公の場では一度も弾いていません。もちろん自宅では長年弾いていて、独自のビジョンを持ち合わせています。この作品には32人の人格が存在するのだといわれました。変奏曲を人間に例えているのです。そのひとりひとりの人格をていねいに紐解いて説明してくれるため、興味は尽きません。もちろん、ぼくの考えと100%一致するわけではありませんが、発想の転換をもたらしてくれます」

今回のプログラムもバッハは欠かせない。そして自作も登場。とりわけスウェーリンクは聴きどころ。彼の演奏は前向きで推進力に満ちあふれているため、聴き手の心に活力を与え、心身を開放してくれる。熟成した響きと年相応の若々しさが混然一体となり、ピアノを聴く喜びを存分に堪能することができる。

さあ、キットの世界に身を委ねましょう!



Photo©Jason Alden

キット・アームストロング (ピアノ)  
Kit Armstrong

今日のクラシック音楽界で最も注目すべき逸材。5歳でピアノと出会い、7歳で数学の勉強を始めた。ロンドンの王立音楽院から音楽の、パリ大学から数学の学位を授与されている。最近ではサラネ指揮バイエルン放送響と共演するなど、欧州の一流オーケストラに相次いでデビュー。13歳からA.ブレンデルに師事。ブレンデルは、「これまでに出会った最も偉大な才能の持ち主」と評し、師として、あるいは良き助言者として彼に影響を与えている。

### チケット発売中

#### ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.31 キット・アームストロング ピアノ・リサイタル

2017年 1.21 (土) 開演15:00 影の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[曲目] C. P. E. バッハ: 自由な幻想曲 嬰へ短調 H.300/Wq.67

アームストロング: 左手のための3つの印象

スウェーリンク: わが青春はすでに過ぎ去り

アームストロング: 細密画

J. S. バッハ: パルティータ第6番 ホ短調 BWV 830

チケット(税込) 一般 正面席 3,500円 バルコニー席 2,500円

U-25\*(バルコニー席対象)1,000円/メンバーズ 正面席 3,200円

\*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。



クラリネットを含むトリオ  
時代も楽器編成もユニーク

3年間のシリーズも最終回。佐藤俊介は、Vol.1のダンスとの共演、Vol.2のピリオド楽器でのドイツ・ロマン派の演奏に、「0から作り上げた達成感」や“新たな発見”があった」と手応えを感じている。とはいえ彼は、「このシリーズでは、毎回異なる企画を立てて、初の試みを必ず含めていきたい」と挑戦を続ける。そこで今回焦点を当てるのは、「20世紀初頭に書かれた、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノの三重奏」だ。「まずは、チェロではなくクラリネットを含むトリオである点がポイント。1910年代から30年代にかけて、20世紀の作曲家がこの編成のために集中的に曲を書いています。同時にこれは音楽的にもユニークな

時代。新ウィーン楽派、新古典主義、ナショナリズムなど、いろいろな表現方法が共存し、年代は同じ作品でもスタイルが全然違います。今回はこの2つを柱として、三重奏曲に同時代の曲を組み合わせました」

この時代の音楽やクラリネットには、元々興味があったという。

「学生時代から近代フランスの曲に惹かれていましたし、20世紀前半の混沌とした時代の作品を集めたりサイタルも行ってきました。またクラリネットは、柔軟で様々な音を作れますし、極限の強弱が出せるレンジの広い楽器。ヴィブラートをかけない澄んだ音を含めて、管楽器の中では一番好きです」

それにしても、クラリネットを含む三重奏は特異な編成だ。

「管楽器との室内楽はもっと大きな編成が

一般的。なにしろヴァイオリンとクラリネットは、どちらも旋律楽器で音域も近い。こうした微妙な距離感の組み合わせができるのもこのシリーズの妙味ですね」

時代と作曲家の個性が融合する  
多彩な5作品

前半は、ミヨーとハチャトゥリヤンの三重奏曲に、ベルクの《クラリネットとピアノのための4つの小品》が挟まれる。

「ミヨーの組曲は、戯曲『荷物を持たない旅行者』の付随音楽を元にした、ユーモアがあって耳をくすぐる曲。若干古典的でもあります。あえて各楽器を統一せず、バラバラにして浮き立つように書かれているのも面白いところ。それにミヨー自身奏者だったヴァイオリンが効果的に使われています。ベルクの作品は、クラリネットのコッ

ポラさんのお気に入り。このタイプの曲もないと時代が感じられません。ハチャトゥリヤンの三重奏曲は、しっとりとして懐かしい、この作曲家ならではの民族色とメランコリーを湛えた作品。歌える場面もたくさんあります」

後半はラヴェルのヴァイオリン・ソナタで始まる。

「第2楽章のブルースは、1920年代ヨーロッパに入ってきたジャズの影響を明確に示していますし、調性の限界で遊んでいるような音楽。複数の調性が同時進行する場面では、独特のカラフルな音色が醸し出されます。終楽章のヴァイオリンの超絶技巧もみどころ。また4年位かけて書かれているのですが、ラヴェルはその理由を“無駄な音を削り取るのに時間がかかった”と話したそうです。つまり最小限の音で最大限

の効果が出せる曲でもあります」

最後のストラヴィンスキー《兵士の物語》の三重奏版は、語りが付いた兵士と悪魔の物語から、作曲家自身が編曲したものだ。

「今回も物語であることを強調したい。各場面を小さな額縁の絵が並んでいるように聴いていただきたいので。曲は、ミヨーのようなユーモアも含みながら、ストラヴィンスキー特有の若干乾いたエレガンスが感じられ、音の組み合わせ方も独特です」

共感しあう3人の演奏  
歴史的なピアノも登場

共演は、クラリネットのロレンツォ・コッポラとピアノの小菅優。

「コッポラさんとは、数年前に鈴木秀美さんのオーケストラ・リベラ・クラシカで演奏したときに仲良くなりました。その後別の機会に会って互いに共感できるものがあり、いつか共演したいと話していたのが、今回実現しました。小菅さんは、15〜6歳頃からの知り合いで、何度も共演しています。彼女は、演奏する音楽に自分の全てを



注ぎ込む、そのエネルギーが凄い」

なお、今回の日本ツアーの中で彩の国公演のみ、作品が生まれた時代の1887年製ニューヨーク・スタインウェイで演奏される。

「一般的なスタインウェイより2世代位前のピアノで、メカニズムや弦の張り方などが異なり、音色の違いはすぐにわかります。コッポラさんもヒストリカル・クラリネットを吹き、私はモダンの弓、ガットとスティールの混合の弦を用いることになると思います。近代の作品をその時代の楽器と共に演奏するのは初めてなので楽しみです」

あらゆる点で興味深い本公演。滅多に聴けない編成や音楽と、互いに刺激し合うエキサイティングなライブを、大いに満喫したい。

佐藤俊介の現在 Vol.3  
20世紀初頭、花ひらく三重奏

## 佐藤俊介

## Interview

取材・文 ● 柴田克彦 (音楽ライター)

Photo ● ヒダキトモコ

時代と曲、編成と楽器  
すべてがエキサイティングなシリーズ最終回

注目のアーティストが3年にわたるプログラムを構成し、演奏する、彩の国さいたま芸術劇場ならではの人気企画「現在」。気鋭のヴァイオリニスト佐藤俊介によるシリーズが、いよいよ最終回を迎える。今回のテーマは、1910〜30年代に作曲されたヴァイオリン、クラリネット、ピアノの三重奏。多様なスタイルの作品を、歴史的な楽器で演奏する。プログラムのすみずみまで佐藤ならではの鋭い視点が光る、刺激的な演奏会だ。

佐藤俊介 ヴァイオリン  
Shunsuke Sato

モダン、バロック双方の楽器を弾きこなすヴァイオリニスト。バロックでは、コンチェルト・ケルンおよびオランダ・バハ協会のコンサートマスターを務め、モダンでは、日本の主要オーケストラや、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、フランス放送フィルハーモニー等と共演。2010年、第17回ヨハン・セバスティアン・バッハ国際コンクール第2位、聴衆賞受賞。出光音楽賞、S&Rワシントン賞等受賞多数。2013年よりアムステルダム音楽院古楽科教授。

ロレンツォ・コッポラ ヒストリカル・クラリネット  
Lorenzo Coppola

フライブルク・バロック・オーケストラ、ラ・プティット・バンド (S. クイケン指揮)、レザー・フロリサン (W. クリステイ指揮)、18世紀オーケストラ (F. ブリュッヘン指揮) などの団体と共演し、またアンサンブル・ゼフィロ、クイケン・クアルテットや、アンドレアス・シュタイアー、イザベル・ファウスト、アレクサンドル・メルニコフ等と室内楽を行う。2004年よりバルセロナのESMuC (カタルーニャ音楽学校) においてヒストリカル・クラリネットの教授を務める。アンドレアス・シュタイアーとの『ブラームス：クラリネット・ソナタ集』、フライブルク・バロック・オーケストラとの『モーツァルト：クラリネット協奏曲』(共にハルモニア・ムンディ) 等、主要なクラリネット曲のレコーディングも行っている。



## チケット発売中

佐藤俊介の現在 Vol.3  
20世紀初頭、花ひらく三重奏

2017年 2.11 (土・祝) 開演15:00 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール  
[出演] 佐藤俊介 (ヴァイオリン)、ロレンツォ・コッポラ (クラリネット)、小菅 優 (ピアノ)

[曲目] ミヨー: ピアノ、ヴァイオリンとクラリネットのための組曲 作品157b  
ベルク: クラリネットとピアノのための4つの小品 作品5  
ハチャトゥリヤン: ヴァイオリン、クラリネットとピアノのための三重奏曲 ト短調  
ラヴェル: ヴァイオリン・ソナタ 長調  
ストラヴィンスキー: 組曲《兵士の物語》(三重奏版)

チケット(税込) 一般 正面席4,500円 バルコニー席3,500円  
U-25\*(バルコニー席対象) 1,500円 メンバーズ 正面席4,100円

\*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

小菅 優 ピアノ  
Yu Kosuge

抜群のテクニックと美しい音色、強い集中力と厚い情感で聴く者を魅了、今最も注目され、評価の高いピアニストである。2005年カーネギーホールでニューヨーク・デビュー、06年ザルツブルク音楽祭で日本人ピアニストとして2人目となるリサイタル・デビューを果たし大成功を収めた。10年ザルツブルク音楽祭でボゴリッチの代役を務め、絶賛される。録音は最新盤の『ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ集第5巻「極限」』を含む15枚のCDをソニーよりリリース。第13回新日鉄音楽賞、アメリカ・ワシントン賞、第8回ホテルオークラ音楽賞、第17回出光音楽賞、平成25年度文部科学大臣新人賞を受賞。16年秋、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集完結記念ボックスセットをリリース、各地でリサイタルを行った。



Photo © Marco Borggreve



Photo © Hiroshi Takaka

長年にわたり日本の音楽界を牽引したピアニスト・中村絃子さんが  
2016年7月26日にご逝去されました。  
中村さんは、1997年から10年間でピアニスト100人を紹介するシリーズ  
彩の国さいたま芸術劇場「ピアニスト100」の第1回に登場し、  
また、2002年からはこのシリーズの音楽監督を務められました。  
当劇場へのご尽力に心より感謝するとともに、謹んで哀悼の意を表します。

# 中村絃子さんを偲んで

文 ● 真嶋雄大 (音楽評論家)

中村絃子さんが今年7月26日(誕生日の翌日!)に他界されてから、そろそろ4ヵ月近くになろうとしている。しかしその面影は日を追うごとに薄れるどころか、巨大な存在であったことを改めて思い知らされるばかり。

それは9月12日に肅々と執り行われた「お別れの会」、「偲ぶ会」でも、一層認識を新たにした。当日の「お別れの会」には400名ほど、「偲ぶ会」には850名ほどの関係者、また生前親交のあった方々が参列、その幅広い人脈は音楽関係はもちろん、政財界などにも及び、なかならず中村さんはどの方とも濃密な友好関係を結んでいたことがひしひしと感じられた。

ここ彩の国さいたま芸術劇場では、「ピアニスト100〜100人を聴く10年。〜」に中村さんの功績は顕著であろう。1年に10人、10年間で100人のピアニストを紹介するという壮大なプロジェクトの初回に登場したのは誰だろう、中村さんご本人。このときの音楽監督は当時劇場の館長であった諸井誠氏であったが、5年を経過した2002年、シリーズの音楽監督に就任した中村さんによって後半の50人が選ばれることになった。

そのセレクトが凄い。前半では、日本人、

外国人を問わず、誰もが知るような著名ピアニストが多く登場している一方、中村さんは国際コンクールの有名審査員や、取り分け若手ピアニストを積極的に起用しているのが目立つ。ここに中村さんの真意が明確に表れている。誰もが知る存在ではなく、次世代を背負う逸材を紹介してこそ



1997年4月12日  
「ピアニスト100 1/100 中村絃子ピアノ・リサイタル」より  
Photo © 栗原義幸

プロジェクトの根幹を提示することができるのであろう。しかしながらそれには当然、危険や批判も伴う。ところがそのリスクを顧みず、自らが確信を持って進めることのできるのが中村さんなのだ。

中村絃子という人にはまったく裏表がない。諂いや媚びもなければ、どんな立場の人をも見下したり貶めたりすることがない。あくまで心のままに自然体で生きて

きたのである。中村さんのご自宅でのホーム・パーティーには幾度か伺いましたが、彼女の作る料理は絶品だ。その詳細についてはまた別の機会に譲るが、ある時ゲストに、30代くらいの若手ピアニストが何人が参加していることがあった。パーティーがひと心地ついた頃、中村さんはおもむろに口を開く。「あなたたち、あの頃はホントに良かったけれど、最近どうしちゃったのかしらねえ」。決して嫌味ではない。それは本心からの吐露と叱咤激励であり、若い人たちを育成しようと情熱を傾ける彼女ならではの愛情表現のひとつなのだ。

ピアニストとしての中村さんについてはここで云々する必要はあるまい。けれども中村さんは社会や政治的背景をも俯瞰したピアノ界、ひいては音楽界の現状を憂い、折に触れ将来に対する提言をいくつも試みている。私は中村さんと講座やトーク・イベントで何度も対談させていただいたが、その発言は常に先駆的であり、幅広い見識と深い洞察力には心底感嘆したものだ。

名実ともにスーパー・スターだった中村絃子さん。彼女はまた途轍もなくチャーミングで、魅力的な女性だった。これからは天上で、世界の音楽界を見守り続けてくれるに違いない。

# Review

レビュー

## MUSIC

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.29  
田村 響 ピアノ・リサイタル  
9.11(日) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



Photo © 加藤英弘

田村響の当劇場デビューとなったリサイタル。長く集中したのち弾き始めるベートーヴェンは作品と真摯に対話するような演奏で、特に「ヴァルトシュタイン」はペダルを十分踏み込みながらも決して濁らない和音が多彩な第1楽章、第2楽章の孤高な響きが印象深く、第3楽章は柔らかな手首から紡ぎだされる歌と推進力ある音楽に心躍った。休憩後はショパンのスケルツォ全4曲。劇的なだけでなく繊細な音楽運びで、作品の構造を意識させるような新鮮な響きを聴かせた。その後アンコール2曲のリラックスした演奏を聴き、改めてスケルツォでの並々ならぬ気迫に感じ入った。

## MUSIC

イザベル・ファウスト&クリスティアン・ベザイデンホウト  
オール・バッハ・プログラム  
10.10(月・祝) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



Photo © 横田敦史

音の1粒1粒がしなやかに踊り、澄み切った響きの歌にあふれる。これこそ音楽の愉悅という幸せな演奏会だった。ヴァイオリン・ソナタでファウストは、緩徐楽章と急楽章とで使用する弓を替え、無伴奏ヴァイオリン・ソナタではさらに別の弓を使うという計3本の弓で演奏。弦にすいっくような運弓で、柔らかい響きや美しいフレーズ感、輝かしく機敏な躍動感をより効果的に表現した。ベザイデンホウトのチェンバロは情感豊かで、ヴァイオリンと絡み合いながら極上の響きを醸し出した。いつまでも終わってほしくない、2人の音楽の対話による真のデュオコンサートだった。

## PLAY

マームとジプシー  
『クラゲノココロ』『モノパノラマ』『ヒダリメノヒダ』  
9.16(金)~19(月・祝)  
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO(大稽古場)



Photo © 三田村亮

2007年に小さなカフェで上演された『クラゲノココロ』、愛猫モモの最期を描いた2013年初演の『モノパノラマ』、藤田が幼少期に左目のみでとらえた世界をモチーフにした2015年初演の『ヒダリメノヒダ』といった、マームとジプシーが過去に上演したことがある3作品を再構築し、1つの物語に仕立てた舞台。ドラムの音が鳴り響き、スクリーンにはクラゲや目の解剖実験などの映像が投影され、常にノイズが差し込まれる。登場人物たちの言葉から浮かび上がるのは、彼らにまとりつく〈死〉の匂い、そこから逆に照射される一瞬の生のきらめきだった。

## MUSIC

レ・ヴァン・フランセ  
10.22(土) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



Photo © 横田敦史

古典派様式による2作品(オンスロー、ベートーヴェン)と、彼らの名刺曲、新古典主義によるブーランク作品の間に、近現代作品(エスケシュ、ジョリヴェ)を配した巧みなプログラムを携えて、レ・ヴァン・フランセが2年ぶりに登場した。彼らのために書かれたフランスの現代作曲家エスケシュによる《メカニック・ソング》では、特殊奏法によるノイズを楔のように打ち込みつつ、反復される音型をピアノと各楽器の間で受け渡ししながら表情を変えていくカレイドスコープのような音世界を展開。超一流の奏者たちが自然体で奏でる色とりどりの音楽に包まれ、客席には笑顔が広がった。

PLAY DANCE MUSIC EVENT CINEMA

大ホール 小ホール 音楽ホール 映像ホール 情報プラザ = 彩の国さいたま芸術劇場

お子様から楽しんでいただける公演です。  
光の庭プロムナード・コンサートには年齢制限はありません。

## PLAY

12. 7(水)  
1万人のゴールド・シアター2016  
『金色交響曲～わたしのゆめ、きみのゆめ～』  
会場: さいたまスーパーアリーナ  
開演 15:00 [詳細はP.21](#)

2017 1. 21(土)  
彩の国さいたま寄席 四季彩亭  
～彩の国落語大賞受賞者の会  
春風亭一之輔  
小ホール 開演 14:00 [詳細はP.21](#)

2017 1. 26(木) - 29(日)  
2006年・蜷川幸雄が「やめましよう。人に見せる作品になっていない。」と言って未完になった作品を、2017年・すべてのスタッフ・キャストが想いを込めて完成させる、さいたまゴールド・シアター 『三人姉妹』  
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO (大稽古場)  
1.26(木)開演18:30、27(金)～29(日)開演14:00  
[詳細はP.21](#)

## DANCE

12. 3(土) 4(日)  
NBAバレエ団  
『Stars and Stripes』-スターズ&ストライプス-  
大ホール 12.3(土)開演11:00/15:00、4(日)開演14:00  
[詳細はP.21](#)

## MUSIC

11.19(土)  
ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30  
ニコライ・ホジャイノフ ピアノ・リサイタル  
音楽ホール 開演 15:00 [詳細はP.21](#)

12.10(土)  
彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画  
「次代へ伝えたい名曲」第8回  
藤原真理 チェロ・リサイタル  
音楽ホール 開演 14:00 [詳細はP.22](#)

12.17(土)  
光の庭プロムナード・コンサート第89回  
トワイライト・スペシャル～光輝く聖夜のおくりもの～  
キャンドル・アート・ナイトとの共同開催で、光の庭にキャンドルが灯る幻想的な雰囲気の中、オルガンとチェロのアンサンブルをお楽しみいただけます。  
情報プラザ 開演 17:00 ※入場無料  
[出演] 山田由希子 (オルガン)、山本 徹 (チェロ)  
[曲目]  
バルバストル: 《ノエル」の形式による組曲第2番》より《偉大なる神、汝の慈しみ》☆  
スカルラッティ: ソナタ K.208 ☆  
J.S.バッハ: 《無伴奏チェロ組曲第1番》より《サラバンド》(ジーク)★  
賛美歌《久しく待ちにし》による即興演奏  
バルバストル: 《ノエル」の形式による組曲第1番》より  
《イエスがお生まれになったとき》  
J. S. バッハ: アリオード  
☆=オルガン・ソロ、★=チェロ・ソロ  
※開演時間が通常と異なりますのでご注意ください。

2017 1. 21(土)  
ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.31  
キット・アームストロング ピアノ・リサイタル  
音楽ホール 開演 15:00 [詳細はP.14-15](#)

2017 1. 28(土)  
光の庭プロムナード・コンサート第90回  
情報プラザ 開演 14:00 ※入場無料  
[出演] 大塚直哉 (オルガン) & 大西律子 (バロック・ヴァイオリン)  
[曲目] ヴィヴァルディ: 協奏曲集「四季」より「冬」 ほか

## EVENT

12.23(金祝) - 27(火)  
彩の国さいたま芸術劇場「劇場体験ツアー」  
大ホール 11:00/13:30/15:30 [詳細はP.23](#)

● …彩の国さいたま芸術劇場 休館日

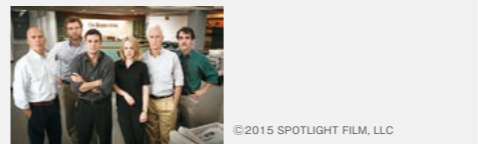
11							12							2017 1						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4								1	2	3	4	5	6	7
6	7	8	9	10	11	12	4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14
13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21
20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28
27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31	29	30	31				

【埼玉会館 改修工事のお知らせ】  
2017年3月31日(金)まで、埼玉会館は改修工事のため休館いたします。

## CINEMA

彩の国シネマスタジオ  
[全席自由・各回入替制・整理券制]  
大人 1,000円 / 学生 500円 [入場時に学生証をご提示ください]  
※料金は当日現金支払いのみ

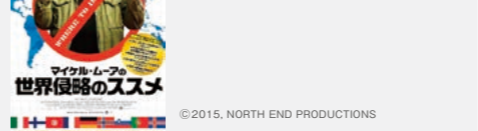
12.8(木)～11(日) 映像ホール  
『スポットライト 世紀のスcoop』  
(2015年/アメリカ/128分)  
[監督] トム・マッカーシー  
[撮影監督] マサノブ・タカヤナギ  
[出演] マイケル・キートン、マーク・ラファロ、レイチェル・マクアダムス、リー・シュレイパー、ジョン・スラッター ほか  
8(木)～10(土) 10:30/14:00/18:00  
11(日) 10:30/14:00



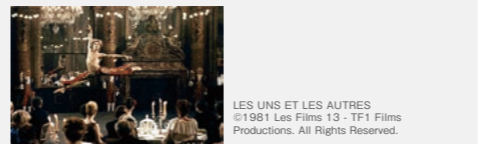
12.22(木)～26(月) 映像ホール  
『さざなみ』  
(2015年/イギリス/95分)  
[監督] アンドリュー・ヘイ  
[出演] シャーロット・ランプリング、トム・コートネイ ほか  
22(木)～25(日) 10:30/14:00/18:00  
26(月) 10:30/14:00



2017. 1.6(金)～9(月・祝) 映像ホール  
『マイケル・ムーアの世界侵略のススメ』  
(2015年/アメリカ/119分)  
[製作・監督・脚本] マイケル・ムーア  
6(金)～8(日) 10:30/14:00/18:00  
9(月・祝) 10:30/14:00



2017. 1.19(木)～22(日) 映像ホール  
『愛と哀しみのボレロ デジタル・リマスター版』  
(1981年/フランス/185分)  
[監督・脚本] クロード・ルルーシュ  
[音楽] ミシェル・ルグラン、フランシス・レイ  
[振付] モーリス・ベジャール  
[出演] ジョルジュ・ドゥン、ダニエル・オルブリフスキ ほか  
19(木)～22(日) 10:30/15:30



PLAY DANCE MUSIC

大ホール 小ホール 音楽ホール 映像ホール 情報プラザ = 彩の国さいたま芸術劇場

\*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

## PLAY

発売中  
1万人のゴールド・シアター2016  
『金色交響曲～わたしのゆめ、きみのゆめ～』  
12.7(水) 15:00 さいたまスーパーアリーナ  
[企画・原案] 蜷川幸雄 [脚本・演出] ノゾエ征爾  
[出演] 60歳以上の一般公募による出演者  
ごまどり姉妹/木場勝己  
原 康義/妹尾正文/岡田 正/清家栄一/新川将人/堀 文明  
さいたまゴールド・シアター、さいたまネクスト・シアター ほか  
チケット(税込) 全席指定 一般3,000円  
一般 前売3,300円 当日3,500円  
高校生以下(3歳以上)1,000円/メンバーズ3,000円

## 発売中

彩の国さいたま寄席 四季彩亭  
～彩の国落語大賞  
受賞者の会 春風亭一之輔  
2017年 1.21(土) 14:00 小ホール  
[出演] 春風亭一之輔(彩の国落語大賞・2席)、  
三遊亭金馬(ゲスト)、春風亭正太郎  
チケット(税込) 全席指定 一般3,000円  
ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)2,000円  
メンバーズ 2,700円

## 発売日 一般・メンバーズ 12.17(土)

2006年・蜷川幸雄が「やめましよう。人に見せる作品になっていない。」と言って未完になった作品を、2017年・すべてのスタッフ・キャストが想いを込めて完成させる、さいたまゴールド・シアター『三人姉妹』  
2017年 1.26(木) 18:30、27(金)～29(日) 14:00  
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO (大稽古場)  
[作] アントン・チェーフ [演出] 井上尊晶  
[出演] さいたまゴールド・シアター ほか  
チケット(税込) 全席自由(整理番号付) 2,000円

## 発売日 一般 2017年 1.21(土) メンバーズ 1.14(土)

彩の国さいたま寄席 四季彩亭  
柳亭市馬  
2017年 4.29(土・祝) 14:00 小ホール  
[出演] 柳亭市馬 ほか  
チケット(税込) 全席指定 一般3,000円  
ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)2,000円  
メンバーズ 2,700円

## 発売日 一般 2017年 2.4(土) メンバーズ 1.28(土)

埼玉会館リニューアル・オープン記念事業  
『万作・萬斎の世界』  
2017年 4.16(日) 埼玉会館 大ホール  
※詳細が決まり次第発表いたします。

## DANCE

発売中  
NBAバレエ団  
『Stars and Stripes』  
-スターズ&ストライプス-  
12.3(土) 11:00/15:00・4(日) 14:00 大ホール  
[出演] NBAバレエ団 ゲストダンサー: 二山治雄  
[演目] タレル・グラント・ムールトリー 振付: 新作  
平山素子 振付: 新作  
ジョージ・バランシン 振付: スターズ&ストライプス  
チケット(税込) 一般SS席 10,000円 S席 8,000円  
A席 6,000円/学生席 2,000円/メンバーズ SS席 9,000円 S席 7,200円 A席 5,400円  
[主催] NBAバレエ団 [提携] 彩の国さいたま芸術劇場  
[公演のお問合わせ] NBAバレエ団事務局  
TEL.04-2937-4931 (月～金 9:00～17:00)  
www.nballet.org

## 発売日 一般 11.26(土) メンバーズ 11.23(水・祝)

Noism1  
近代童話劇シリーズvol.2  
『マッチ売りの話』  
+『passacaglia』  
[詳細はP.10-11](#)

## 発売日 一般 12.3(土) メンバーズ 11.26(土)

ピナ・パウシュ ヴッパタール舞踊団  
『カーネーション-NELKEN』  
[詳細はP.12-13](#)

## MUSIC

## 発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30  
ニコライ・ホジャイノフ  
ピアノ・リサイタル  
11.19(土) 15:00 音楽ホール  
[曲目]  
ショパン: アンダンテ・スピアネートと華麗な大ボロネーズ  
変奏長調 作品22  
ショパン: ワルツ第6番 変二長調 作品64-1「小犬」  
ショパン: ワルツ第9番 変イ長調 作品69-1「告別」  
ショパン: ワルツ第10番 短調 作品69-2  
ストラヴィンスキー: ペトルーシュカからの3楽章  
シューマン: アラベスク 八長調 作品18  
シューマン: 幻想曲 八長調 作品17  
※出演者の希望により、一部曲目を変更いたします。何卒ご了承ください。  
チケット(税込)  
一般 正面席 3,500円 バルコニー席 2,500円  
U-25\*(バルコニー席対象) 1,000円  
メンバーズ 正面席 3,200円





画●磯良一

## 貧乏揺すりかよ!

文●岩松了

また名前を間違えられた。若松了と。主催側による演劇公演の告知を載せた冊子だった。劇場側のTさんは、無責任な主催側の不手際をけしからんと言ひ、後日謝りに来ますからと教えてくれた。そして、来た。いや、わざわざ来たわけじゃない。別の用事で来たついでにだ。二人連れ。一人は背広に眼鏡。もう一人はスポーツシャツにジャケット。二人はTさんに誘われるようにして私の前に立った。背広が上司らしく「このたびはホントにどうも」と言う。Tさんは、刷り直してくれるんですか、うちの分はもう処分しましたから、と充分に私のことを慮ってくれて厳しい態度。それに対して二人がどういう返事をしたのか覚えていない。いずれにしても我々はその時、立っていて、脇にソファセットがあった。

「ちょっといいですか?」と背広がソファを指さした。え? 座るのかよ。

眼鏡をかけたその顔、中学校の時の生徒会長がこんな顔じゃなかったか? と思うが話の展開上オレはこいつを嫌な奴にしたてあげようとしているだけかもしれない、とまだ自分を客観視する余力はある私。

それまで成り行きをたどるような目で見ていたスポーツシャツにジャケットが身を乗り出すようにして口を出してきた。夏にどこぞでバカンスでもしたか日焼けしているその顔。「違う話ですけどいいですか?」と言う! 違う話!? もう謝罪は終わりかよ! と思ったが、何を言い出すのか……聞けば……別の仕事を依頼してきやがった! じゃあ適当なとこ見計らってオレがこっちの仕事の話を切り出しますから、とでも打ち合わせてたのか? しかも、しかもである。この日焼け男、貧乏揺すりをしている!

私は完全に余力を無くした! 私の隣に座ってる味方のはずのTさんの膝も揺れてるような気がしてきた。え? グル!? このTさんも! 私を囲む三人で貧乏揺すり!! ……そうか、そうか、謝罪なんて、いや、謝罪というものは、こういうことだものな。これぞリアルというものだ。芝居にしてやる! タイトルは『謝罪』、副題もつけよう。《皆で貧乏揺すり》だ!

いわまつ・りょう

劇作家、演出家、俳優、映画監督と幅広く活躍。さいたまゴールド・シアター『船上のピクニック』『ルート99』の劇作を手掛けた。12月『シブヤから遠く離れて』(作・演出)をシアター・コクーンで上演予定。